

交友関係調査に示される 選択理由・排斥理由の分析*

深見 敦子

目 的

本調査は、ソシオメトリック・テストを用いた交友関係調査に示される選択・排斥理由を、男女別・テスト場面別に分析し比較することを目的としている。

方 法

1. 被験者

三鷹市立第二小学校5年生3クラス、男子64名、女子56名、計120名を被験者とし、1970年5月15日に、ICU学生が教示し、各教室において実施した。**

2. 調査計画

小学校5年生に、グループ学習をする場合（勉強場面）と、昼休みに遊ぶ場合（遊びの場面）とで、誰と一緒にグループになりたいかという質問のソシオメトリック・テストを行なう。用紙に選択者・排斥者の氏名と共にその理由を記入させる。理由は下記のようなカテゴリー化をした後、理由一つを

* 本調査を実施するにあたり、御協力いただきました三鷹市立第二小学校長長沢宣先生をはじめ5年各クラスの担任の諸先生に心から感謝いたします。また、小論作成にあたり、終始懇切丁寧に御指導下さいましたICU助教授古畑和孝先生に、心からの謝意を表します。

** この調査は、ICUにおけるEps 212一般心理学及び教育心理学研究法Ⅲの一部として、ソシオメトリック・テストを実施した際に得られたデータを、コースとは独自に筆者が分析、検討したものである。

一単位とし、各場面ごとに、男女別に集計し、出現率を求め χ^2 検定を行ない比較する。したがって一人に対する選択（排斥）理由が、いくつかのカテゴリーにわたることもある。

3. カテゴリー化

入された理由を選択・排斥ごとに集め、比較的類似していると思われる理由項目をまとめてサブ・カテゴリーを作り、さらにその類似したものをまとめるという川喜田（1968）のKJ法の要領でカテゴリーを作成し、下記のように命名した。各カテゴリーと、それに含まれる代表的な理由項目を以下に示す。

〔選択理由〕

カテゴリーA（個人的なよさがあるから）……まじめ、明るい、やさしい、自分ですすんでやる、物を貸してくれる、頭がよい、野球がうまい等、

カテゴリーB（社会的な面によさがあるから）……グループをうまくまとめる、楽しく遊べる、楽しく勉強できる等、

カテゴリーC（物理的な距離が近いから）……家や席が近い、前のクラスで同じだったから等、

カテゴリーD（友達だから）……小さい時から一緒に仲が良いから、長くつきあってきたから、友達だから等、

カテゴリーE（これから仲良くなりたいから）……違うグループだから組がえになって始めだから友達になれそう もうすぐ転校するから等、

カテゴリーF（好感が持てるから）……気があう、感じがよい、好きだ等、

〔排斥理由〕

カテゴリーP（性格的にいやだから）……うそをつく、ずるい、甘ったれる、なまいき、暗い、楽しげがない等、

カテゴリーQ（自分勝手に人のいやがることをするから）……暴力をふるう、変なことをする、さわぐ、掃除をさぼる等、

カテゴリ	勉強場面			遊びの場面			全場面				
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体		
選 択 理 由	A	60(35.3)	70(45.2)	130(40.0)	54(45.0)	55(51.9)	109(48.2)	114(39.3)	125(47.9)	239(43.4)	
	B	7(4.1)	8(5.2)	15(4.6)	13(10.8)	11(10.4)	24(10.6)	20(6.9)	19(7.3)	39(7.1)	
	C	31(18.2)	11(7.1)	42(12.9)	18(15.0)	4(3.8)	22(9.7)	49(16.9)	15(5.7)	64(11.6)	
	D	41(24.1)	48(31.0)	89(27.4)	18(15.0)	13(12.3)	31(13.7)	59(20.3)	61(23.4)	120(21.8)	
	E	3(1.8)	4(2.6)	7(2.2)	2(1.7)	11(10.4)	13(5.8)	5(1.7)	15(5.7)	20(3.6)	
	F	21(12.4)	12(7.7)	33(10.2)	9(7.5)	12(11.3)	21(9.3)	30(10.3)	24(9.2)	54(9.8)	
	A~F以外	7(4.1)	2(1.3)	9(2.7)	6(5.0)	0(0)	6(2.6)	13(4.5)	2(0.8)	15(2.7)	
	排 斥 理 由	P	26(23.6)	60(48.8)	86(36.9)	17(21.8)	51(54.8)	68(39.8)	43(22.9)	111(51.4)	154(38.1)
		Q	50(45.5)	44(35.8)	94(40.3)	23(29.5)	24(25.8)	47(27.5)	73(38.8)	68(31.5)	141(34.9)
		R	16(14.5)	6(4.9)	22(9.4)	18(23.1)	3(3.2)	21(12.3)	34(18.1)	9(4.2)	43(10.6)
S		13(11.8)	12(9.8)	25(10.7)	16(20.5)	13(14.0)	29(17.0)	29(15.4)	25(11.6)	54(13.4)	
P~S以外		5(4.5)	1(0.8)	6(2.6)	4(5.2)	2(2.2)	6(3.6)	9(4.8)	3(1.4)	12(3.0)	

表1. 選択・排斥理由に関する各カテゴリに示される実数及び出現率 ()内は%

カテゴリーR（相手の身体・能力が劣ると感じるから）……下手，遊びのじゃま，デブ，のろま，バカ等，

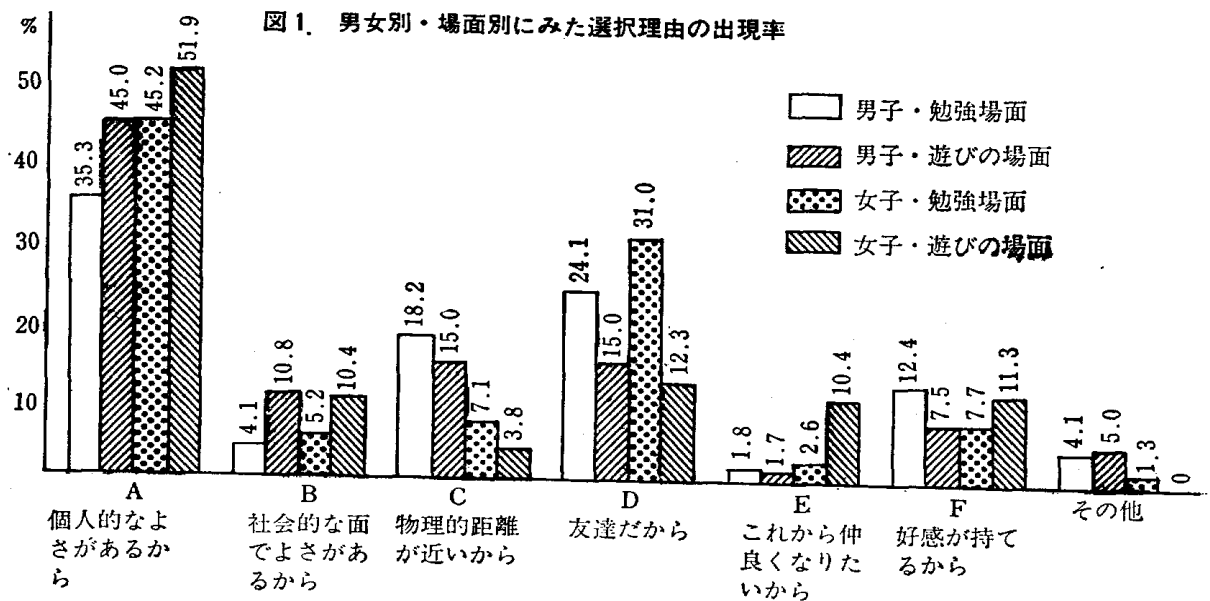
カテゴリーS（相手に好感が持てないから）……気があわない，こわいきらい等，

実際には，選択理由 551 単位，排斥理由 404 単位が得られた。表 1 にそのうちわけを示す。

結果および考察

1. 選択理由に関して

選択理由の出現率を，男女別・場面別に図示したのが図 1 である。これに



よると，全体の傾向としてはカテゴリーAに属する個人的な良い面に関する選択が最も多く，全体の半数近くを占めている。しかしカテゴリーAも含めてすべてのカテゴリーで，男女・場面によってかなり出現率が異なっているのが一目でわかる。そこで各カテゴリーにおける選択理由の出現率が，男女によって，状況によって全体として異なるかどうかを検定した結果が表 2 に示されている。選択理由に関しては，各場面および全体の場面での男女差，そして男女両性および全体における差が明白に示された。ここで示された相

	男 女 差			場 面 の 差		
	勉強場面	遊びの場面	全場面	男子	女子	全体
選択理由 (df=5)	13.16*	16.18**	23.59***	11.28*	21.15***	26.43***
排斥理由 (df=3)	17.18***	26.64***	42.44***	7.11 Δ	N.S.	8.66*

表2. 各カテゴリーにおける選択, 排斥理由の出現率の全体的な相違性に関する

 χ^2 検定値(*** .005, ** .01, * .05 で有意な出現率)
 Δ .10, N.S. 有意差なし

違が何に基いたものであるかをさらに検討するために, 各カテゴリーごとに男女別・場面別出現率を検定した結果が表3に示されている。

勉強場面と遊びの場面を比較してみると, 表3に示されるように, カテゴリーBは遊びの場面で有意に多く選択の理由としてあげられ, カテゴリーDは勉強場面で有意に多くあげられている。また, その差は有意ではないが, カテゴリーAに関しても遊びの場面での出現率が高く, カテゴリーAの中の性格の面に限ってみれば遊びの場面の方が有意に多く出現している。

	男 女 差			場 面 の 差		
	勉強場面	遊びの場面	全場面	男子	女子	全体
A. 個人的なよ さがあるから	3.29 Δ	N.S.	4.13*	2.76 Δ	N.S.	3.70 Δ
B. 社会的な面 でよさがあるから	N.S.	N.S.	N.S.	4.93*	N.S.	7.30**
C. 物理的距離 が近いから	8.94***	6.85**	16.64***	N.S.	N.S.	N.S.
D. 友達だから	N.S.	N.S.	N.S.	3.61 Δ	12.29***	14.62***
E. これから仲 良くなりた いから	N.S.	6.34*	6.36*	N.S.	5.68*	4.94*
F. 好感が持て るから	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

表3. 各カテゴリーごとの選択理由に関する男女別・場面別にみた出現率の χ^2 検定値(df=1) 符号は表2と同じ

場面別の選択理由をさらに性差と組み合わせてみると、男子ではカテゴリーBにおいて勉強より遊びの場面の方が出現率が高いが、女子では有意な差は見られない。逆に、カテゴリーDでは女子が勉強場面で遊びの場面より多くの出現率を示しているのに対し、男子では有意な差はない。また、カテゴリーEは女子のみが遊びの場面で有意に多く選択の理由としてあげている。表からわかるように、場面によって選択理由は異なってくるが、それは性差と密接な関係があり男女とも同じ場面で同じ選択理由をあげることは少ないことが示された。

次に各場面ごとに性差について見よう。まず勉強の場面では、カテゴリーCは男子の方が女子より有意に多い出現率を示している。その他のカテゴリーについては有意な性差を見出すことはできないが、カテゴリーAの中で性格的な理由に限ってみると男子より女子の方が有意に多く、逆に能力が優れていることを理由にする場合は男子の方が有意に多いことが示された。

遊びの場面では、カテゴリーCとEに有意な男女差が見られ、男子は席が近いとか家が近いという理由から友達を選択しているのに対し、女子は今仲の良くない友達と仲良くなりたいという願望から遊び友達を求めることが見出された。

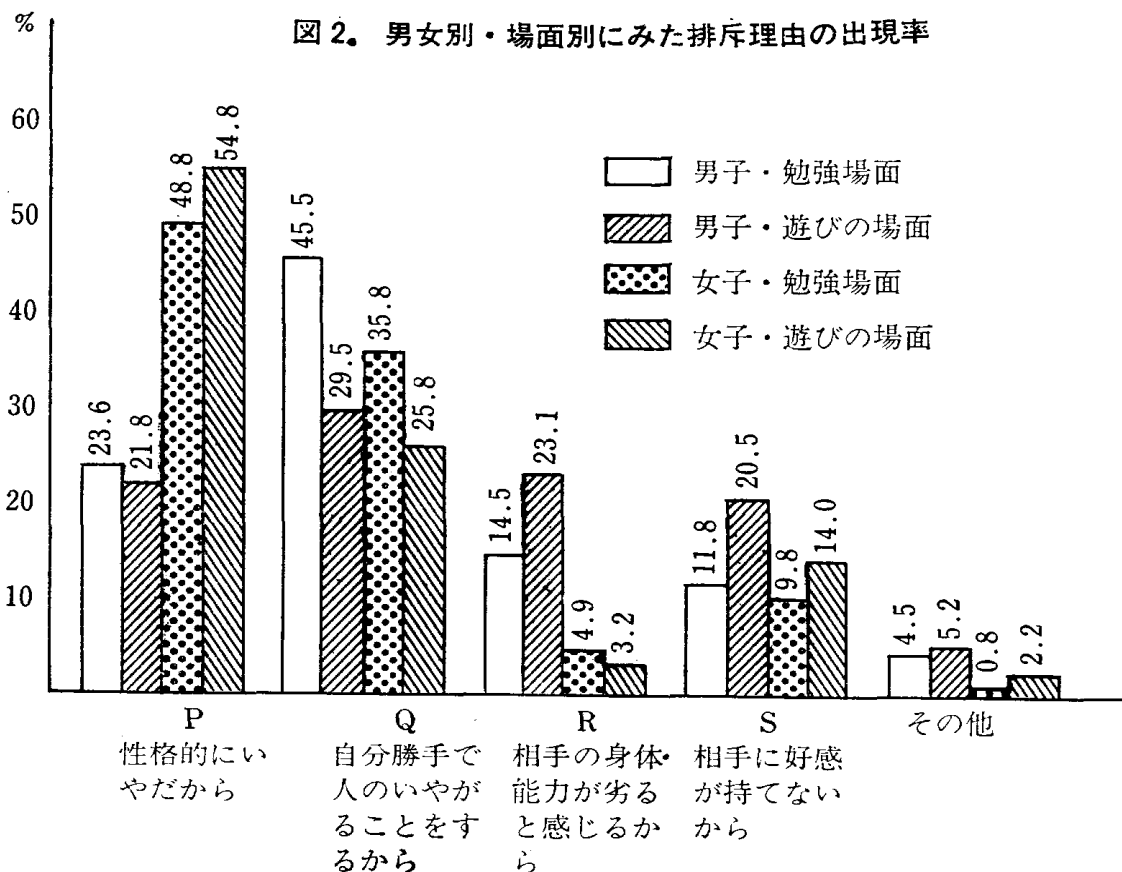
場面の相違と性差とをあわせてみると、勉強場面と遊びの場面での選択理由の出現に差のあるカテゴリーB、Dには性差はなく、逆に場面での選択理由の出現に差のないカテゴリーA、C、Eには有意な性差が見られた。結局、男子は女子に比べて相手を選択する時に個人的な良い点をあげて選択することは少なく、その代わりに物理的な距離が近いことによって友達を選択しているのに対し、女子は相手の個人的な良さ、特に性格的に良い点から友達を選択し、また、現在友達ではない人をも、これから友達になりたいと望む傾向があることが見出された。

なお、全体としては、性差に関係なく相手の社会性などの社会的な面から友達を選択するのは遊びの場面に多く、逆に友人関係が持続していることによって勉強場面での友人が得られやすい傾向が見出された。

カテゴリーEに関しては性差・場面差とも見出されなかった。それ故、相手に対する好感は性別や状況に関係なく選択の理由としてあげられていると言えよう。

2. 排斥理由に関して

排斥理由の出現率を図示した図2からわかるように、女子の半数はカテゴリーPに属する性格的な面から排斥しているのに対し、男子の半数近くは相手の非社会性に関するカテゴリーQの理由から排斥していることが見出された。



全体的な傾向として、各カテゴリーにおける出現率に性差・場面差が見られるかどうかについて検定したところ、表2に示されているように各場面および全場面とも著しい男女差が見出されたが、場面差については男子の中でも女子の中でも有意な差は見られず、わずかに男女をあわせて全体として見

た時のみ、有意な場面による相違が見られた。しかし排斥理由のあげ方が著しく異なる男女をあわせて場面の違いによる全体の傾向をみることには、多くの問題が含まれてしまうので適切な方法とは言えない。したがって排斥理由は場面によっては明白な差がないと考えた方が誤差が少ないと考えられる。

そこで各カテゴリーごとにさらに検討したところ、表4に示されるような結果を得た。それによると、場面による相違はカテゴリーQのみに見られ、

	男 女 差			場 面 の 差		
	勉強場面	遊びの場面	全 場 面	男 子	女 子	全 体
P. 性格的にいやだから	15.76***	19.29***	34.74***	N. S.	N. S.	N. S.
Q. 自分勝手に人のいやがることをするから	N. S.	N. S.	N. S.	4.92*	4.27*	7.20**
R. 相手の身体・能力が劣ると感じるから	6.32*	13.65***	20.50***	N. S.	N. S.	N. S.
S. 相手に好感が持てないから	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.

表4. 各カテゴリーごとの排斥理由に関する男女別・場面別にみた出現率の χ^2 検定値 (df=1) 符号は表2と同じ

特に勉強場面で遊びの場面よりも有意に多く非社会性が排斥理由としてあげられていることが見出された。その他のカテゴリーについては、場面による相違は見出されなかった。

次に男女別に排斥理由をみると、はじめに指摘したように、理由のあげ方自体に男女差のあることが明らかにされた。カテゴリーPに関しては、勉強・遊びの両場面とも女子の方が有意に多く排斥理由としてあげていて、選択理由としても女子がカテゴリーAの中で性格的な面を多くとりあげていることと明白に対応していることが見出された。

また、カテゴリーRは勉強・遊びの両場面で男子の方が有意に多く排斥理由としてあげている。

場面と性別の両方から排斥理由をとらえてみると、カテゴリーPとRは場面による差はないが男女差が大きく、男子は女子より性格的な面での排斥が少なく、相手の能力が低いことによって排斥していることが見出された。その反対に性差の見出されなかったカテゴリーQは、勉強場面での排斥理由として多くとりあげられやすい。カテゴリーSには男女差・場面差とも見出されなかった。これは選択理由に関しても好感に対しては差が見出されなかったのと同様に、好感が持てるか持てないかということは、性・場面に関係なく排斥（選択）理由としてあげられる傾向があることを示している。

これらのことから、男子は相手の個人的な性格の面よりも社会的な面での自分勝手な行動をとることを排斥理由とし、協調して行動できない相手を排斥しやすいことが見出された。これに対し、女子はまず相手の個人的な性格を排斥理由にあげているのが目立った。

3. 全体の考察

全体的にみて選択の際に多くあげられている理由は、カテゴリーAの個人的な良さ（43.4%）とカテゴリーDの友達であること（21.8%）であり、この順位に関しては男女差・場面の差は見られない。しかし排斥の際に多くあげられる理由は、カテゴリーPの性格的な弱点（38.1%）とQの自分勝手な点（34.9%）であるが、男子と女子では比率は反対になり（P：男—22.9%，女—51.4%，Q：男—38.8%，女—31.5%），この差は遊びの場面の方がより著しい。このようにあるカテゴリーは理由として表明されやすいが、理由の出現率を比較してみると、選択理由は男女・場面によって異なった出現率を示し、排斥理由の出現率も男女によって著しい相違があることが見出された。しかし排斥理由の出現は場面によっては一つのカテゴリーを除いてほとんど差がないことが見出された。

性差の問題についてみると、一般的に女子は相手の性格的な面（カテゴリーA，P）を重視しているのに対して、男子は社会的な面や協調性などの点（カテゴリーB，R）を重視しているという傾向が見出された。また、一般

的に場面による理由づけに差のみられるカテゴリー（B, D, Q）には性差は見られず、逆に各場面共通のカテゴリー（A, C, P, R）に関しては性差があらわれやすいという傾向も見出された。この点は従来のソシオメトリック・テストを用いる社会心理学的研究において最も見落されやすい点である。結局実験状況の設定と、それに用いるテストとの間のこのような点を十分考慮に入れて実施してはじめて、実験に用いられる被験者に共通の関連性をもつ実験状況が作成できるのである。

本調査に関してはカテゴリー化の妥当性の問題が残っている。今回は川喜田（1968）の方法によってやや主観的にカテゴリーを求めたが、必ずしも妥当であるかどうか問題である。田中熊次郎（1956）がかなり以前に行なった友人結合の構成要因の分析では、友人関係の原動的基礎的要因として表5のような5つの要因を示した。今回のカテゴリーとの関係を見ると、大体のカテゴリーは田中の分類を網羅しているが、個々の分類に関しては必ずしも一致していない。特にカテゴリーAは個人的な良い点をすべて含んでいるのに対し、田中はそれを性格面（Ⅱ）、尊敬（Ⅲ）、利益的条件（Ⅳ）に分類し、Ⅲは高学年で一番多く、Ⅳは年齢が大きくなるにつれて少数になることを示している。

友人関係の原動的基礎的要因 (田中, 1956)	今回の選択理由 カテゴリー	田中と同じ基準で排斥していると考えられるカテゴリー
I 相互的接近(空間的距離の接近)	C	なし
II 同情, 愛着(部分的人格的結合)	A D F	P
III 尊敬, 共鳴(全体的人格的結合)	A	R S
IV 交換的協同(取引の関係)	A	P R
V 合力的結合(相互扶助的)	B	Q
	E	

表5. 友人関係の原動的基礎的要因（田中, 1956）と今回のカテゴリーとの関係（排斥理由は田中と同じ基準の負の面と考える）

今回の結果では性格的な面（Ⅱ）が最も多く、Ⅲ、Ⅳはごく少数であった（Ⅱ—40.5%、Ⅲ—2.9%、Ⅳ—0.7%）。これらの点から考えると、Ⅱ、Ⅲ、ⅣをカテゴリーAに含めても今回に関する限りでは大差がなかったように思われる。

これとは逆に、Ⅱの同情・愛着の要因にはカテゴリーA、D、Fが含まれる。特にAは全体の40%以上もあり、D、Fもそれぞれ21.8%、9.8%もあること、またAは性差、Dは場面の差が見られる点などから分けて考えた方がよいように思われる。ただしFに関してはAの消極的表現とみてもさしつかえないかもしれない。田中の分析は現実レベルでの友人関係の分析であるから、カテゴリーEのような願望のレベルの要因は含まれていない。カテゴリーEは全体としての割り合いは少数ではあるが、遊びの場面で女子から選択理由にあげられている点を考慮するならば、無視できない要因と考えられる。

排斥の理由については田中は分析していないが、同じ基準の負の面が排斥理由として現われると考えるならば、表5のような見方もできよう。Ⅰの空間的接近は排斥の基準にはならないと考えるならば、今回のカテゴリーにあてはまらないのは当然である。選択の理由との関連から考えてもカテゴリーP、Rが、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳにまたがることは考えられる。排斥に関するカテゴリーには男女による相違が大きいことを考えあわせると、このようなカテゴリー化が全く妥当でないとは言えない。

全体の傾向として女子の方が男子よりもカテゴリーA、Pに示される性格の面により多く反応していることは前述したが、田中もⅡの同情・愛着の要因は女子の方に多い傾向を示した。しかし田中は尊敬・共鳴（Ⅲ）はむしろ男子に多いことを示したが、今回の結果では選択理由にはそのような傾向は見られないが、排斥理由では男子の方がそれによって多く排斥していることが得られた。また、田中は全体としては男女がかなり共通した反応を示すと述べているのに対し、今回の結果は著しい性差を示したことは注目できる。そのことはテスト場面の相違とも関係すると思われるが、この点は今後の研究課題である。さらに、このような問題は年齢に基く発達差からも詳細に分

析されなければならない。このようなカテゴリー化の問題は今後十分に研究される必要があり、例えば選択と排斥を同一尺度上で示せるようなカテゴリーを考案することなどから解決されよう。

直接には交友関係の調査とは関係ないが、Newcomb (1960) の対人魅力の諸相の分析に示される讚美、交互性、知覚された支持の領域にまで、このような調査を拡大し、どのレベルの魅力に性差や場面差が見られるか、そしてこれらのレベルと選択・排斥の強度との関係などについてさらに詳細な分析が必要である。

要 約

小学校5年生に、勉強場面と遊びの場面についてのソシオメトリック・テストを実施して、その選択・排斥の理由を10個のカテゴリーに分類した。その結果、選択・排斥理由は性別・場面別にみるとかなり異なって示されていることがわかり、一般的には場面による差のないカテゴリーには男女差があり、男女差のないカテゴリーは場面によって出現率が異なる傾向が示された。性別に見ると、女子は相手の性格的、個人的な面を理由に選択（排斥）しているのに対し、男子は相手の社会的な面、協調的な面を重視する傾向が見出された。なお、カテゴリー化の問題は田中（1956）の研究との関連から考察された。

参 考 文 献

川喜田二郎 発想法 中公新書 1968

Newcomb, T. M. Varieties of interpersonal attraction.

In D. Cartwright & A. Zander (Eds) Group Dynamics.

2nd ed. Evanston, Ill 1968: Row, Peterson 1960 Pp. 104—119

三隅二不二・佐々木薫（訳）グループ・ダイナミックス 誠信書房 1969
Pp. 127—145

田中熊次郎 友だちのでき方とその発達

教師のための児童心理学講座Ⅱ 岩崎書店 1956 Pp. 117—133

田中熊次郎 ソシオメトリーの理論と方法 明治図書 1959

An Analysis of the Reasons for "Acceptance" and "Rejection" as Revealed by an Investigation of Friend Relationships

Atsuko Fukami

The purpose of this study was to analyze the reasons for "Acceptance" and "Rejection" as derived from sociometric tests, and to compare those reasons in terms of :

- a. a study situation and a play situation (situational differences), and
- b. sex differences.

The data was obtained by administering a sociometric test to 120 fifth-grade primary school children. The children were asked to rate their three "best-liked" and three "least-liked" friends. The reasons for the children's "Acceptance" and "Rejection," as indicated by the data, were then classified into ten categories which were constructed by the author (six categories dealt with "Acceptance"; four with "Rejection").

Analyzing the number of responses in each category clearly indicated that the children's reasons for "Acceptance" and for "Rejection" form a definite relationship to situational differences and also to sex differences. Generally speaking, a significant difference between boys and girls was noted for those categories which show no situational differences. Conversely, those categories which revealed no differences between the sexes indicated a significant difference between the two situations.

A further analysis, by sex, of the "Acceptance" and "Rejection" differential was conducted and revealed the following :

a. The boys' reasons for "Acceptance" and/or "Rejection" were likely to point the social character and/or cooperativeness of those he accepted or rejected.

b. The girls, on the other hand, were more likely to signify that they placed more importance on the more delicate and tender emotions and other desirable personal characteristics.

The matter of categorizing the responses of the sociometric test which was used in this study is as discussed in the study by Tanaka (1956).